



# 射水

IMIZU

# 水



特集

全国植樹祭「幣饌料奉奠奉告大祭」  
大伴家持卿 生誕1300年記念祭事

# まほろばの越中

射水神社宮司  
松本正昭



第六十八回全国植樹祭に伴う  
天皇皇后両陛下の富山県行幸啓  
にあたり、格別の思召しをもって  
当射水神社を始め県内旧国幣社  
と指定護國神社に幣饌料をお供  
えになられる旨を賜り、二十七日

午後、ANAクラウンプラザホテル富山で河相侍従長より幣饌料を拝受致しました。同日帰著早々、役員・奉賛会員の参列の下、幣饌料奉奠奉告大祭を執り行い、竹の園生の弥栄を祈念申し上げるとともに、愈々に御神威の発揚に努めるべく心を新たに致したところであります。

この度の植樹祭は「かがやいて 水・空・緑のハーモニー」を主題として開催され、天皇陛下には、花粉を飛ばさない優良無花粉スギ「立山 森の輝き」・コシノヒガン・ヒメコマツを、皇后陛下にはコシノフユザクラ・キタコブシ・ホオノキをお手植えになられ、またお手播き所で、天皇陛下にはエドヒガン・タブノキの種を、皇后陛下にはヤマザクラ・マルバマンサクの種をそれぞれにお手播きになりました。

さて、折しも、本年は『万葉集』編纂の中心人物で越中国守でもあった大伴家持卿生誕千三百年の節目の年を迎えました。

家持は、越中の雄大な自然の姿を「山高み 河遠しろし 野を広み 草こそ茂き」(卷一七番歌)と、越中風土の中で山や川、鳥や花を歌い、越中万葉の原点ともいう景観を詠い上げています。

とりわけ、わたしたちの郷土・越中は、三方に高山を巡らし、百川が水をみなぎらせて海に灌ぎ、万葉の昔から川の国、まさに、川のまほろばといえます。

なかでも「射水川」は万葉集に六度見え、最も多く詠われています。往時は「南吹き 雪消溢りて 射水川 流る水沫」(卷一〇六番歌)、「射水川 雪消溢りて 逝く水の いや増しに」(卷二六番歌)と詠われるように、雪解け時や台風によって川が氾濫し、人々の生活を脅かす、今より遙かに水量の多い大河だったのです。

射水川は、現在の小矢部川と庄川が合流していた大河であり、二上山の裾野を巡って滔々と流れ、今日も二上山から見下ろすと、大蛇のように屈曲蛇行しながらも、人々の生活の糧としての恵みを与えつつ、海に灌ぐ様を見ることが出来ます。この小矢部川と庄川は明治期の分離工事により、別々に海に灌がれて氾濫することは少なくなりました。

自然は時として、荒ぶる神のような猛威を振るい、災害を引き起こします。しかし同時に、豊かな山の幸、海の幸、川の幸をもたらし、それ故に古代の人々は自然の威力、自然の美、自然の恩恵に対する素朴な感動の中に、聖なる山、聖なる川という信仰心を抱かせたのであります。

郷土・越中は万葉の舞台です。家持が住んだ国府の眼下には、奈呉の海が広がり、その海を渡ってくる、あゆの風は潮の香りを運び、背後には「神からや そこば貴き」(卷一七番歌)と詠われた二上神の鎮まる二上山の秀麗な山容がせまり、鳥が鳴き声を響かせます。まさに、この地で家持の詩魂は培われ、越中万葉歌が開花したのです。

今更ながらに万葉人の心情から、二上神・射水神社への尊崇の心が想われます。

# 崇敬奉賛会 定例総会



定例総会

射水神社崇敬奉賛会の定例総会が七月二十日、会員七十名が出席して開催されました。  
社殿での正式参拝の後、総会は国旗儀礼として国歌斉唱に始まり、物故会員に対し黙禱。宮司、穴田甚朗会長がそれぞれ挨拶し、五月二十七日に第六十八回 全国植樹祭とやま御臨場と地方事情御視察による行幸行啓にともなって幣饌料を賜り、臨時大祭「幣饌

料奉奠奉告大祭」が斎行されたことが報告されました。

議事では、「新規入会会員紹介」後、前年度の「活動・収支決算報告」、本年度の「活動計画・予算案審議」についてそれぞれ報告、承認されました。

特に「祭儀の奉賛、新たな教化活動の企画・展開等」として、

1. 大伴家持卿生誕一三〇〇年記念事業関連の諸企画を計画実行するとともに、富山県・高岡市等諸団体の主催事業に参画・後援・協力する。
  2. 恒例の夏越大祓に『万葉集』に詠まれる射水川「小矢部川」より汲まれた斎水を社殿向拝に初めて弁備し、参列者自身が人形代を浮かべて除災招福を祈る。
  3. 高岡七夕まつり（八月一日〜七日）に参画して七夕祭を斎行し、縁結びと諸芸上達を祈願し、若年層の参拝を勧奨する。
  4. 「お伊勢参り落語会」（十月二十三日）三遊亭栄楽師 特別協力
  5. 新嘗祭での越中国の特産品として「進納品」奉納を勧奨する。
- その他、崇敬者参加型の神社祭事の斎行、行事の企画立案と催行について、

時宜に応じて行う旨が諒承されました。また、会員増員勧奨として、新たに「射水神社 参拝のしおり」御神縁を結ぶ「崇敬奉賛会入会のご案内」を一万部作成し、昇殿参拝祈禱、及び県内外からの正式団体参拝等に配布していることが報告されました。

引き続き、記念講演として、本年は白山開山千三百年にあたり、当社撰社「院内社」御祭神が菊理媛命との御神縁から、「神意に叶う」と題し、白山本宮・加賀一ノ宮 白山比咩神社宮司の村山和臣氏を講師にお招きし、その御神威や白山比咩神社の御由緒等についてご講演を頂きました。



村山和臣先生による講演

うつくしの社 射水神社の集い

神宮神嘗祭奉祝

お伊勢参り落語会  
開催のお知らせ

とき 十月二十三日（月）

午後二時

ところ 射水神社参集殿

木戸銭 一、五〇〇円「入場料」



さんゆうてい えいらく  
三遊亭栄楽師

【申込】社務所

電話 〇七六六（二）三二〇四

## ◆新入会員

株式会社金刺金型製作所

安部 篤子

上田 正俊

大嶋奈津美

小黒むつ子

北川 貞吉

島田 恵吉

関口 光子

辻村ゆかり

前田壽美子

計 一法人、九名の新入会（敬称略）

# 天皇皇后両陛下

## 第六十八回全国植樹祭

### 富山県行幸啓に際し、幣饌料を賜る

#### 全国植樹祭に伴う臨時大祭「幣饌料奉奠奉告大祭」は、実に四十八年ぶり



正面大鳥居より第一鳥居を進む一行

天皇皇后両陛下には全国植樹祭とやまへの御臨席と地方事情御視察のため、五月二十七日から二十九日の間、富山県へ行幸啓遊ばされました。二十七日の午後、行在所であるANAクラウンプラザホテル富山に宮司が参向。聖上よりの優渥なるお言葉とともに幣饌料を河相待従長より伝達頂きました。



幣饌料の奉奠

午後六時、第一鳥居前に列立、修祓。殿内に参入後、宮司一拝、開扉、献饌の後、松葉布衣姿の奉仕員が幣饌料の納められた辛櫃を奉昇して殿内に参入、幣饌料は宮司により外陣案上に奉安されました。

祝詞では、昭和二十二年の地方御巡幸に際し、当時の細入村笹津で先帝陛下の思召しにより立山



祝詞奏上



御神楽「人長舞」を奉奏

杉の若苗が植えられ、これが県下の治山治水への意識が高まり、全国での植林、国土緑化運動につながって、全国植樹祭開催の契機となった由、そして、聖壽の萬歳と全国植樹祭とやまの成功、また富山県下一円の林産業をはじめとする諸産業のさらなる振興と県民の弥栄が祈られました。

引き続き、殿内が滅灯され、大前の雪洞と菊花御紋弓張提灯の仄明かりの中、神楽笛、箏、和琴が奏でられ、神職により御神楽「人長舞」が奉奏されました。

尚、このたびの幣饌料御下賜を記念し、真神の若苗三本が本殿の瑞垣の傍に神社役員の手により植えられました。

当社でも、これを契機として、さらなる鎮守の杜づくりに向けて取り組んで参ります。

## 治山治水への思召

射水神社代表役員・奉賛会長

### 館哲二富山県知事への御下問

先帝陛下は昭和二十二年、東砺波郡城端町（現、南砺市城端）で木炭出荷状況を御視察になられました。このとき、木を伐り出したあとのことをしきりにご心配され、「あとに樹を植えているだろうね」とおたずねになります。そこで全県的な植樹運動を展開することがお心に浴うものだと考えた当時の館哲二県知事（後に射水神社代表役員・奉賛会長）は、県民の治山治水意識の向上と植林意欲の向上のため、陛下にお手植えを願ひ出しました。

戦前は、お手植えの木が枯れたりすると、管理者が責任を問われることをお耳にされ、それ以来陛下はお手植えをおやめになったそうです。しかし、戦後になり、責任云々という話もないだろうと、陛下は、幾度も被害を被ってきた富山県に対し、植林の奨励、国土緑化に役立つのならと富山県での植樹に応じられました。

特に『富山県行幸記録』には、館知事の談話として「陛下の思召を今後の県内植林事業のもととし、県民各位と共に一層植林に努め、治水百年の大計をたてたいと思う次第である。」と記されています。



お手植えされる昭和天皇（昭和22年11月2日付、「北日本新聞」第一面）



館哲二射水神社代表役員  
（遷座八十年祭奉賛会々長）  
昭和29年旧社務所前にて撮影

幣饌料とは、陛下の思召しをもって、行幸先の都道府県に鎮座される旧官幣社・国幣社・別格官幣社と指定護國神社に供され、当社は国幣中社としての旧社格により拝受致しました。皇室の御崇敬は、近時では昭和五十年、遷座百年の式年大祭に際し天皇陛下よりの幣帛料、また昭和四十四年の全国植樹祭に際しての幣饌料、また今上陛下と皇后陛下よりの幣饌料は一昨年に行幸啓以来の事となります。

古城の杜に「鬼」が出た！

# 開運厄除「節分祭」鳴弦・鬼追いの儀を初齋行

## I、節分とは

「節分」といえば、「二月三日」だという方も多いのではないのでしょうか。

一年は立春・立夏・立秋・立冬を節目として四季に分かれ、それぞれの前日が「節(の)分(かれ目)」となります。つまり、本来、年に四度ある節分が、冬から春へと移る立春前日のみが特に強調されるようになりました。

また、立春は旧暦では正月節にあたり、新しい年を迎える時なので、節分を「年越し」という地方も多く、民俗学では、一年の境目であるがゆえに「福の神」も「鬼」もやって来るとし、この日に追儺や豆撒きが行われると説かれています。



鳴弦の儀(弦打ちの儀とも)

## II、年中行事に親しむため、旧来の節分行事を再考



鬼追いの儀(鬼やらいとも)

二月三日、県下の神社仏閣でも神職や住職によって、賑やかに豆を撒く様子がテレビや新聞報道で多く見かけられます。

豆撒き以外にも、神社へ豆を持って行き自分の歳の数を供えたり、イワシの頭をヒイラギとともに玄関口に挿したり、または豆をいり、その焼け具合で一年の天候を占う豆占いなど、節分の行事について調べると全国的にも様々です。

このたび、当社でも旧来の節分の行事を再考すべく、「鳴弦の儀」と「鬼追いの儀」を初めて行いました。



「鳴弦の儀」とは、矢をつがえずに弦を引き、その音を鳴らすことによって悪鬼・邪気を祓うもので、青竹の弓を手にした宮司が幣殿で当年の鬼門と裏鬼門の方角に向けて鳴弦を行いました。

「鬼追いの儀」では、本殿に差し掛かる手前の中門に現れた「鬼」に向かい、先ず宮司が「鬼遣ろう！」の掛け声とともに豆を打って鬼を追いかい、その後、「福男」「福女」の役をお務めいただいた年男・年女や厄年の男女ら六名が「鬼は外、福は内」の声も高らかに豆を撒き、一年の開運と健康を祈念しました。



福男・福女による豆打ちの儀



奉仕いただいた皆さま

# 夏の祓い「いみづの輪くぐり」

## 『万葉集』に詠われる射水川の水を用い、「大祓」祭儀を斎行

### I、夏越の大祓とは

本来、「大祓」は六月と十二月末に行われ、半年間の罪穢れを神々のお力によって祓い清め、人間本来の清浄な心身に復する意味があり、平安時代には既に確立されていた国家行事です。

現在も宮中や伊勢の神宮、全国の神社でも行われ、清浄を貴ぶ日本人にとって大切な神事として伝わります。

六月三十日に行われる大祓は特に「夏越の大祓」ともよばれ、「茅の輪」くぐりとともに、人形代によるお祓いが行われ、その祝詞の最後にも、神職が「川に災厄を持っていき流す」と記されるなど、本来は川辺で神事が執り行われていました。



清浄な射水川(現在の小矢部川河口)の「齋水」を用いた「人形代祓え」が初めて行われました。6月30日早朝、神職が射水川に向向して櫓桶に水を汲み、夕刻の神事では社殿前の櫓桶に川の水を注ぎ混え、清浄な「齋水」として舗設されました。



午後6時から斎行の大祓では、茅の輪くぐりの後、自身の災厄・罪穢れを移して手にする「人形代」を櫓桶の水に参列者それぞれが浮かべてお祓いしました。



神事に使用された「櫓桶」と、清浄な川の流れに見立てた三本の「齋串御幣」

### II、神社祭儀の本儀復古へ向け、初めての取り組み

しかしながら、今日では、全国の神社の多くで、河川に人形代を流すことは出来ず、お祓いの後は焼納することで代えられている現状であり、当社でも諸社同様に行われてきました。

そのため、当社では様々な祭儀考証のもと、より本来の姿に近付けられるべく、『万葉集』を編纂して生誕千三百年となる大伴家持が詠み、当社に關しても所縁が深い「射水川」の水を汲み用い、大祓に初めて使用しました。



# 大伴家持卿 生誕一三〇〇年記念祭事

越中の国守であった大伴家持が編纂した日本最古の歌集『万葉集』には、二上山をはじめ風光明媚な郷土の光景が数多く詠まれ、往古より四季折々に多彩な祭りが行われてきました。とりわけ、「二上山の賦」よりは、国守としての当社御崇敬の程が伺われます。

大伴家持が数え年で生誕一三〇〇年となる本年、富山県・高岡市では諸団体が記念の行事を企画・実行されています。当社でも「射水神社と家持や『万葉集』との所縁を知ってもらうきっかけ」とし、郷土愛の醸成につなげるべく、次の祭事を執り行いました。

無病息災を祈る

『うなぎ奉献祭』初齋行



生きた二尾の鰻

一般的に「土用の丑の日」にうなぎを食べることは江戸時代に平賀源内が広めたとされています。しかし、実際には鰻の滋養強壮が夏バテ防止に良いことは古くから知られており、平賀源内は『万葉集』巻十六に所収される大伴家持が詠んだ古歌があったことを根拠にしたと言われています。

つまり、現代において、日本の年中行事の一つとして、また夏の伝統食文化として広く定着した鰻が、実は越中国ゆかりの大伴家持が詠まれた歌がももてであったのです。

このたびの節目を記念し、高岡水産物市場と市内の鮮魚店より初めて鰻が奉献されました。

「土用の丑の日」である七月二十五日、生きたままの鰻を二尾と、蒲焼きに調理された鰻がそれぞれ高坏に盛られ、さらには家持が詠まれた歌を記した短冊を添えて神前に奉り、この夏の無病息災が祈られました。なお、生きた鰻は射水川と詠まれた小矢部川へと放流されました。



高坏に盛られた蒲焼き調理された鰻

石麿に われ物申す 夏瘦に

良しといふ物ぞ 鰻取り食せ

〔訳〕石麻呂さんに申し上げます。夏瘦せに良いそうですから、鰻を捕ってお召し上がり下さい。

(大伴家持『万葉集』巻十六、三八五三番歌)



献上される生きた鰻

## 『七夕祭』 万葉集の七夕歌を奉灯に

夏の風物詩「高岡七夕まつり」に併せて、本年も『七夕祭』を斎行しました。

八月一日からの期間中、境内には七夕のジャンボ吹き流しや笹飾りがされ、参拝の方が結び付けられた色とりどりの短冊が夏風に揺られ、今年新たに設けられた園児の絵と『万葉集』の七夕歌がしたためられた「奉灯」として鮮やかに神社を彩りました。

七日、ご神前には七夕にちなんだ食材「素麺（天の川・織り糸）」と「金平糖（星）」を供え、参列の園児たちが元気な声で「たなばたさま」を奉唱し、境内で「願い短冊」のお焚き上げを行いました。



七夕飾りがされた境内



ささの葉 さ～らさら～♪



この奉灯の絵はぼくたち、わたしたちが描きました！  
『高岡第一学園附属 第二幼稚園』



橘慶一郎復興副大臣、高橋正樹高岡市長、板倉均北日本新聞社長らも訪れました。

## 節目を祝う『かたかご茶会』

北日本新聞社主催

例祭前日の四月二十二日、歌人・大伴家持や万葉の時代に思いを馳せる記念茶会が、参集殿和室並びに境内の野点所「八照」で行われました。

各茶席には家持の和歌をしたためた軸や短冊が飾られ、越中の地にちなんだ道具や菓子・料理でもてなしし、高岡市万葉歴史館から和歌などを紹介したパネルも展示され、訪れた約三五〇人が春の境内で万葉の茶趣に浸りながら、茶会を堪能しました。

# 杜の景色

## 祭事暦

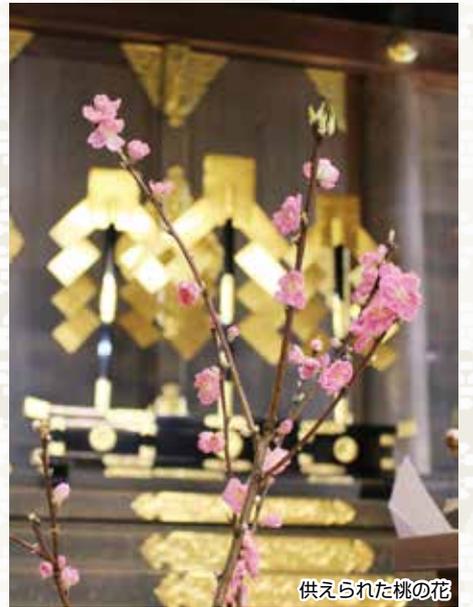
1月1日	歳旦祭 初詣
14日	左義長(射水の火祭り)
2月3日	節分祭
11日	紀元祭
17日	祈年祭
3月20日	春季皇霊祭
4月3日	神武天皇祭遙拝
14日	高岡市護國神社 春季例大祭
18日	日吉社春祭
23日	例祭
29日	昭和祭
30日	院内社春祭
5月13日	悪王子社春祭
27日	幣饌料奉奠奉告大祭
6月18日	茶筌清祓式
22日	植樹祭
27日	鎮火祭
30日	夏越大祓 人形感謝清祓式
7月3日	職場安全祈願祭
10日	悪王子社秋祭
20日	崇敬奉賛会定例総会
25日	鰻奉献無病息災祈願祭
28日~30日	奉納書道展
8月7日	七夕祭
毎月1日朔日祭・23日月次祭	



茶筌塚 茶筌碑(昭和25年)建立

三月三日の「ひなまつり」にあわせて、県内在住の崇敬者より桃の花が奉納され、大前に献じられました。  
孟宗竹から切り出した自然物のままの青竹に奉書を巻き、紅白の水引で結わえ花器としました。春風に誘われて咲きほころんだ桃の花が新春の香を漂わせ、参拝者を楽しませてくださいました。

### 桃花を献供



供えられた桃の花

### 愛用の茶筌に感謝を込めて

六月十八日、茶筌清祓式を高岡古城公園、中の島の茶筌塚で執り行い、「茶道裏千家淡交会高岡支部」の在田吉保支部長以下関係者らが参列されました。

木々の青々とした葉が生い茂る中、射水神社での茶会に先立ち斎行されているお祭りで、淡交会と「古儀茶道敷内流高岡支部」が隔年でご奉仕をされています。

茶筌を清祓・焼納、参列員一同が日頃使い慣らした茶筌に感謝し、更なる精進を誓いました。



茶筌清祓式

## 後世につなぐ鎮守の杜へ

国民的行事としてすっかり根をおろした全国植樹祭の式典で記念植樹が行われ、当神社においても神の苗木の植樹が六月二十二日に行われました。

このたびの植樹祭にあたり、祖先・先人より受け継いだ鎮守の杜を大切に、確実に次代へと受け継いでいくことに、あらためて心を新たにしています。

なお、この歴史ある古城の地に遷座され百四十年を過ぎた当神社では、当地にふさわしい緑の杜の景観を念頭に、長期的な展望に立って、境内に樹木草花の植栽を進めております。



宮司と穴田会長



植樹される役員と参列員

## 神主・巫女さんに挑戦!

七月十日から五日間、市内の高陵中学校の生徒四名が神主・巫女になって、「十四歳の挑戦」として色々なことに挑戦しました。

初日は悪王子社の秋祭りに参列するため、二上山の中腹に行き、社殿周りの清掃やお祭りの準備をしました。

最終日には団体で来られた方々を装束姿でお出迎え、撤下品を手渡し、まさに神様とお参りの方々との仲を執り持つ、神主・巫女として立派に役目を果たしました。



悪王子社の秋祭り

# 速報 一年の総りに感謝を捧げる『新嘗祭』古儀・神楽歌の再興に向けて

## I、「新嘗祭」古儀復興に向けて

昨年十月十日、社誌編纂事業での関係史料蒐集において、新たな史料が東京都内で見つかりました。これによると当年の豊穰・豊漁の報賽を捧げて神恩に感謝する本社の新嘗祭には、かつて富山県知事、各郡市長、総代らが参拝、県下一円よりの特産物を「進納品」としてお供えし、歌舞音楽が奉奏されていたことが詳らかとなりました。

古儀復興への取り組みとして、昨年の祭典案内にあたり左の「趣意書」を同封し、県内外の崇敬者各位に特産物の進納を募りましたところ、当日の御神前には新米、酒、海の幸、山の幸の味物始め、越中福岡の菅笠、高岡銅器などの工業製品に至るまで、例年の四倍となる進納品が寄せられ、神恩感謝の祈りが捧げられました（前号既報）。

### 「新嘗祭」の古儀復興に向けて

かつて、本社の新嘗祭には、当年の豊穰・豊漁の報賽を捧げるべく、富山県知事始め、各郡市長、総代らが参拝され、御神前に県下一円よりの特産物を「進納品」（新米、酒、魚、野菜、果物、生花、工業製品など）としてお供えし、「古女舞」と「新嘗祭神楽歌」が奉奏されてきました。

このたび、古儀復興へのひとつの契機として、崇敬奉賛会々員並びに崇敬者各位より特産物の進納を賜りたく、茲に謹んでお願い申し上げます。

◇進納：奉るごと、献納、奉納。  
進納品には下記を附し、御神前に供します。

越中 一太郎 (例)

進納品は祭典前日の二十二日(木)までに、本社、また郵送頂きます場合は封筒に在ります。

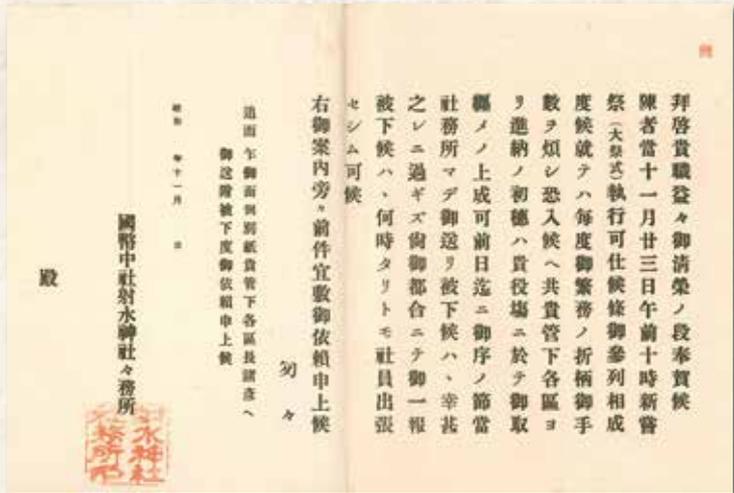
新嘗祭について説明した趣意書

## II、「新嘗祭神楽歌」の再興へ

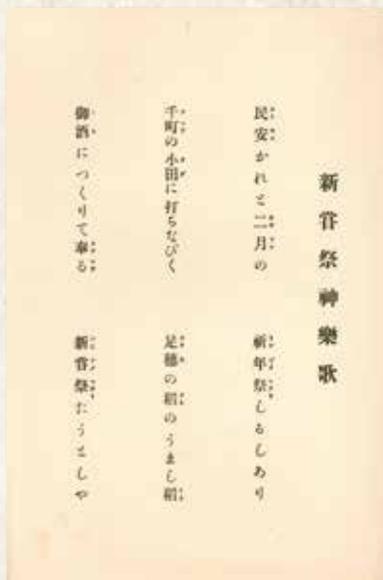
その後の調査で、祭儀関連綴りの一部である『新嘗祭御初穂進納者芳名簿』の見返しに「新嘗祭神楽歌」が採録されていることが確認されました。

民安かれと二月の 祈年祭しるしあり  
千町の小田に打ちなびく  
足穂の稲のうまし稲  
御酒につくりて奉る

新嘗祭たうとしや



昭和期の「新嘗祭案内状」



同見返し「新嘗祭神楽歌」



「新嘗祭御初穂進納者芳名簿」表表紙

〔註〕

※1 儀式唱歌附祝日大祭日唱歌

(奥好義編 寛裕舎明治二十六年十月刊)では「垂

※2 同右では「饌」

これは明治二十四年(一八九一)六月、文部省により祝日大祭日の儀式について「小学校祝日大祭日儀式規定」が公布され、二年後の同二十六年八月、奉祝儀式で歌うべき曲を示した「祝日大祭日唱歌」に選定された「新嘗祭」(小中村清矩作歌 辻高節作曲)の歌詞と思われる



昭和期の祭典 献じられた進納品

すが、「御饌」を「御酒」につくるなど、明らかに当社の独自性が見られます。  
 新穀で一夜酒を醸した名残であるか断定は出来ませんが、神楽歌奉奏の再興とともに、歌詞に込められた先人の想いに寄り添いたいと思います。

## ご奉納

・真榊五色布帛（儀式殿）

壹対

・御神酒徳利

壹対

・緋毛氈

貳畳

嶽家



・銅地菊花御紋吊燈籠

参基

（株）正三商店 八塚 庄三

壹基

米田 弘之  
見津美紀子

壹基  
壹基



・菊花御紋提灯

貳張

井上機材株式会社  
三鐵工業株式会社

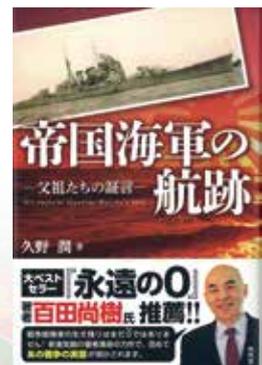
壹張  
壹張



・『帝国海軍の航跡―父祖たちの証言―』

（青林堂 平成二十六年十二月刊）

著者 久野 潤（歴史学者）



・カワラナデシコ

貳拾株

藤田 敬子  
四津 悦子  
小黒むつ子  
堀田 里実



## 人事

### 新任

出仕	武田 将輝	平成二十九年四月一日
巫女	宇於崎寧音	平成二十九年四月一日
巫女	上田 里穂	平成二十九年六月一日

（敬称略）

## うつくしの杜 結納

数知れぬ人々が織りなすこの世界で巡り合った縁をお二人の胸に刻むため、結婚への決意をかたちにし、婚約のしるしとしてお互いの家族を結び合います。

しきたりは地方や各家によって違いはありますが、心を込めて男性から女性へ思いを届ける大切な時間です。今では仲人をたてず、両家で執り行う事が多くなりました。

新郎側は結納品を整え、新婦側は受け側としておもてなしをします。

結納の品は、5・7・9・11・13品目と縁起が良い奇数を選びます。婚約指輪はプロポーズの時、又は結納式の時に渡しますが、結納品の数には入りません。

また、結納返しは後日頂いた結納品の全体を見てからお返しをします。

お二人にとって気持ちの上で大きな節目になり、また責任や覚悟を新たにする大事な時となります。ともに喜びを分かち合い、婚礼への気持ちを更新にし、心ひきしまる結納は、ご両家の皆様にとっても、かけがえのない思い出となるでしょう。

結納が滞りなく取り交わされた後は、郷土で「二上神」と尊称する結びの神・瓊瓊杵尊をお祀りする射水神社で、ご両家の永遠の絆と繁栄をお祈りします。

### のし蓬萊 結納専門店

お問合せ 0766・24・7088

<http://www.noshi-hourai.com/>



### 瑞祥

和モダンを基調としたクラシカルな雰囲気を感じさせるのが「瑞祥」。天井にあしらわれた鏡が会場を広々と感じさせ、桜の名所百選の一つである高岡古城公園の「さくら」を基調とし、落ち着きある色味でデザインされた絨毯はシックな印象を与えます。

### 饗膳殿

繊細な組子細工から溢れだす照明が優しい光を放ち温かみのある「饗膳殿」。天井の照明は木漏れ日を感じさせるデザインとなり、木のぬくもり溢れる空間が上品で落ち着いた雰囲気。和装だけでなく、ドレスも映えるので衣裳も自由に楽しめます。

# 七五三詣のご案内

射水神社で、一生残る感動の一日を。

大切な記念日を、  
特別な思い出に

七五三は、三歳の男女（髪置）、五歳の男児（袴着）、七歳の女兒（帯解）のお祝いで、大人に近づいていくことを神様にご奉告、感謝し、成長を祈る行事です。

お子さまの今日までの無事な成長に感謝し、今後の幸せと成長をお祈りする大切な日は、ふるさと富山の守り神・射水神社にお参りください。

平成29年 七五三年表				
※数え年・満年齢どちらでもお参りできます。				
	数え年	満年齢	性別	
7歳	平成23年生	平成22年生	女の子	
5歳	平成25年生	平成24年生	男の子	
3歳	平成27年生	平成26年生	男の子	女の子



お参りのみの方は、ご予約の必要はありません。

※数え年とは生まれた年を「一歳」と数え、お正月を迎えるたびに日本人のすべてが神々から新しい生命を頂き、一つずつ年齢を重ねる数え方です。



ふうたん  
おすすめ

衣装+着付+写真（6切1ポーズ1枚）  
すべてがそろったお得なセット！

## すずくせつアツ

3歳	男の子「袴」	25,000円（税抜）
	女の子「被布」	25,000円（税抜）
5歳	女の子「振袖」	26,000円（税抜）
	男の子「袴」	25,500円（税抜）
7歳	女の子「振袖」	26,500円（税抜）

なかよしきょうだいで一緒におまいり♪  
2人分のセット！ 写真は（6切2ポーズ各1枚）

## きょうだいらせつアツ

44,000円（税抜）

## おやこせつアツ

57,000円（税抜）

## アイセット

6切（約25cm×約20cm）1ポーズ1枚  
15,000円（税抜）

衣装をお持ちの方はごひびりー

## 7.5.3プラン

★おじいちゃん、おばあちゃんへのプレゼントに  
お焼増し／追加ポーズも承ります。

### 当日のながれ

おまいりの日、神社にお越しただくだけで全てが整います！！

### 貸衣装をご希望の方

おまいりの3日前までに衣装店へお運びいただき、お気に入りの衣装をお選びください。ご予約のお衣装は、おまいり当日、神社内の美容室にご用意いたします。

### 神社内の美容室へご案内

着付・ヘアメイクをします。

### おまいり記念撮影

写真は、お子さまの様子をみて、おまいりの前後いずれかに撮影します。おまいり撮影が終われば神社で着替えを、そのまま帰ることが出来ます。

後日、お仕上りの写真などを自宅にお届けします。

### セットプランのご予約・お問合せ

社務所（七五三窓口） 0766-22-3104  
ご希望のおまいりの日・時間を電話でお伝えください。



第二期 設置予定場所（一部）



奉納された吊燈籠（第一期）

お問合せ 射水神社社務所  
☎〇七六六・二二三一〇四

## 献灯「吊燈籠」ご奉納のお願い（第二期）

芳名を刻み、永代にわたり神前に「献灯」が灯されます

● 神社の社頭風景を特徴づけるものの一つに燈籠があります。

屋外で見られる石造の大きなものが一般的ですが、廻廊に金属製の吊燈籠（釣燈籠）が並べられるなど、その素材や形態はさまざまです。

当社では、さらなる御神徳の昂揚を図り、御神前への一灯を奉るべく、崇敬者（会社・個人・団体）の皆様へ献灯「吊燈籠」（一基 十五万円）のご奉納をお願い致したく、茲に謹んでご案内申し上げます。

何卒ご理解をいただき、ご献灯賜りますようお願い申し上げます。

## 瞿麦 — なでしこ —

夏から秋にかけて咲く秋の七草の一つです。

『万葉集』には二十六首詠まれ、そのうち十二首が伴家持の作で、家持の好んだ花でもあったようです。

家持卿生誕千三百年を迎えた本年の春、県内在任の当社社崇敬奉賛会の女性によって植えられました。

六月下旬、古くより日本女性の称「大和撫子」にたとえられる繊細な五弁の花をつけました。



## 編集後記

畏くも行幸啓に際し、幣饌料を賜り齋行された臨時大祭を記念して、特別展「射水神社における皇室の御崇敬」を開催。神社所蔵の皇室ゆかりの品を一日限りで展覧し、郷土の「歴史と誇り」を改めて感じる機会となりました。

また、大伴家持卿生誕より数え年で千三百年を祝い、各所で記念のぼり旗がはためき、数々の記念催事が行われ、当社でも『万葉集』に収録される家持の和歌にちなむ数々の祭儀を齋行しました。

先祖代々天皇のお側近くに仕えた大伴氏、家持が越中で詠んだ歌意は、所縁の地に住む私たち市民県民共通とする「おしえ」でもあります。

「祖先から受け継いだ、この美しい郷土を愛する心」を絶やすことなく、更なる地域の活性につなげて行かなければならないと思います。